日豪草の根交流計画

(2011-2017)

戦後の和解の取り組みに関する報告書





外務大臣 河野 太郎

日本と豪州は、戦後長年にわたる相互補完的な経済関係と幅広い層の人的交流を経て、良好な二国間関係を築いてきました。近年では、アジア太平洋地域と国際社会の平和と安定に貢献するため、安全保障・防衛分野においても協力を一層強化しています。現在の両国は、基本的価値と戦略的利益を共有する「特別な戦略的パートナー」となっています。

過去には、日本が豪州人戦争捕虜を含む多くの人々に対し、多大な 損害と苦痛を与えた歴史がありました。一昨年の8月14日に発出さ れた安倍内閣総理大臣談話で述べられたとおり、戦後日本は、痛切 な反省と心からのお詫びの気持ちを示すとともに、二度と戦争の惨 禍を繰り返さないという平和の誓いを立てました。日本に対して、 豪州の人々が、過去の記憶からの敵意ではなく、寛容の精神と友人 としての手を差し伸べてくれたことに、心から感謝の意を表します。

日豪草の根交流計画は、平成 9 年度に、豪州人元戦争捕虜や御家族の方々を日本に御招待し、「心の和解と交流」を促し、両国間の相互理解と友好関係を促進するために開始され、これまでに 120 名の豪州人元戦争捕虜等の方々が訪日されました。

訪日された方々には、日本の平和と繁栄への取組や、日本の社会、 文化に関する理解を深めていただくとともに、捕虜収容所があった 地方都市や英連邦戦死者墓地も訪問していただきました。外務省と しても、豪州人元戦争捕虜や御家族の方々が訪日される度に、直接、 当時の経験や未来志向の日豪関係の強化についてお話を伺ってきま した。本計画は、未来に繋がる日豪間の「心の交流」を促進してき たものと感じております。

その一方で、訪日できる元戦争捕虜の方々が少なくなってきてしまったことを踏まえ、全豪退役軍人会とも相談の結果、ここで一区切りをつけ、本年、日豪両国において終了記念事業を行うとともに、日豪草の根交流計画のこれまでの成果を振り返ることといたしました

しかしながら、平和な未来に向けた日豪両国の交流に関する我々の 取組が終わることはありません。今後は、本計画の趣旨や意義を踏 まえ、日豪間の若い世代の交流を進めて参ります。

この成果報告書では、日豪草の根交流計画の日豪双方の参加者の声を中心に、本計画の歴史的意義を紹介しています。こうした日豪両国の和解の足跡をしっかりと残すことにより、今後も日豪両国民が未来に向かって手を携えて、平和で豊かな世界のために協力する一助となることを心から祈念します。

2017 年 9 月 外務大臣 河野 太郎



ダン・テハン 退役軍人担当大臣

2017 年は、オーストラリアにとって第二次世界大戦のいくつかの主要な出来事から 75 周年にあたります。

我々の国と我々の価値、我々の自由を守るために尽くし犠牲を払った方々に、私たち国民は常に敬意を表してきました。

第二次世界大戦中に従軍したオーストラリア国民は 100 万人近くに及びます。このうち、オーストラリア戦争記念館の記念碑に名前が刻まれている戦死者は約4万人、さらに負傷者は4万数千人、戦争捕虜は約3万人を数えました。

戦争の歴史を思い起こすことは、個人や家族、地域社会が払った悲劇的な代償を振り返ることにつながります。

その思いがあるからこそ、今回「日豪草の根交流計画」の報告書に 序言を寄せることができて喜びを感じます。

この計画は、日本政府が全豪退役軍人会(RSL)の支援のもとで行ってきた取り組みです。

計画の一環として、2011年から2017年にかけて元捕虜とその家族が日本政府の招きで日本を訪問しました。

各回とも我が国の退役軍人が様々な年齢層の日本人と会い、経験を 分かち合う機会となりました。

この計画が成功を収めるためには、両国の参加者が不都合な真実を直視する必要がありました。

そうした歴史を受けとめること、しかもそれを人間的なレベルで受けとめることによって、日豪両国の参加者は、両国の友好関係と相互理解の強化に貢献することができました。

日本政府と RSL には、我が国退役軍人に払われた敬意と名誉に感謝申し上げたいと思います。

また日本国民の皆様には、我が国退役軍人への暖かいおもてなしと、 それぞれの話に真剣に耳を傾けていただいたことにお礼を申し上 げます。

両国の暗い歴史から教訓を得ようと努めることで、両国の現在と未 来はさらに明るいものとすることができます。

2017年9月

退役軍人担当大臣 ダン・テハン

はじめに

オーストラリアの視点

この報告書は**日豪草の根交流計画**¹に関するものであり、日本政府により本計画のゲストとして 日本に友好的に招かれたオーストラリア人の元戦争捕虜(とその家族)に焦点を絞っている。

このプロジェクトは日本政府によるイニシアチブである。

その歴史は 1994/1995 年に行われた長谷川和年駐オーストラリア大使と豪日協会連盟事務局 長兼全豪退役軍人会(RSL)会長のテリー・コルホウン氏、W.B.「ディッガー」ジェームズ少 将との一連の討議に遡る。

RSL 幹部と 2011 年に日本に招かれた 5 名の元戦争捕虜 2 による一連の訪問が成功したことに加え、友好の手プロジェクト 3 (1994-2006)の完了などの他の行事、日本に対する RSL の「*強硬*」路線 4 に変化が生じたこと、日本とオーストラリアの二国間協定(貿易、安全保障)が徐々に増えたことを通じて、本計画への支援が広がった。

このプロジェクトの下、2 つの長期的取り組みが行われた。1 つ目は*平和・友好・交流イニシアチブ*であり、これは 1997 年から 2005 年まで実施された。2 つ目は 2010 年に日本政府が*日豪草の根交流計画*という名称で復活させた計画で、これは 2011 年 3 月から 2017 年 1 月の最後の訪問まで続いた。

平和・友好・交流イニシアチブ (1997-2005)

1997年から2005年にかけて、59名のオーストラリア人(元戦争捕虜とその家族)が最初の友好計画の取り組みの一環として日本を訪問した。

計画の後年(2002年以降)になると、新たに設立された POW 研究会が参加者の受け入れに協力し、参加者の詳細(及び訪問した場所)を研究会の記録の一部として残した⁵。

この間、日本政府は RSL 全国幹部会のメンバーを日本に招聘(2000 年 11 月及び 2003 年 3 月) し、これらの訪問を通じて、元戦争捕虜による将来の訪問には政府関係者との面会、主だった場 所への訪問、友好的に経験を共有するための日本人との懇談の機会を設けることが確保された。

¹ このプロジェクトの別名は次のとおり知られている。日豪交流プログラム、日豪草の根交流計画、オーストラリア人 POW 招聘プログラム、日本人・POW 交流プログラム、および日本人・POW 友好プログラム。これらのプログラム は戦争終結 50 周年(1995)に日本政府が初めて提案した平和・友好・交流イニシアチブの後継プログラムである。

 $^{^2}$ デレク・ロブソン氏(全豪退役軍人会(RSL)事務局長)、イアン・ケネット(タスマニア州支部会長)、デビッド・マクラクラン少将(ビクトリア州支部会長)、ジョン・バーゲス(クイーンズランド州支部会長)、ビル・ゲイナー(西オーストラリア州支部会長)、ピーター・エバンス准将(首都特別地域支部会長)による RSL 全国幹部会の親善訪問(2002 年 11 月)と、2011 年 3 月に実施された 5 名のオーストラリア人の元戦争捕虜(とその家族)による訪問であり、その際、第二次世界大戦中に戦争捕虜に与えられた多大な損害と苦痛について、日本の外務大臣(前原誠司衆議院議員)が日本政府を代表して元戦争捕虜(とその家族)に謝罪した。謝罪を受けた元捕虜はハロルド G.ラムジー氏、ノーマン E.アンダートン氏、ジャック・シモンズ氏、ローリー・リチャーズ医師、ジョージ F.ブレット氏の 5 名である。

³「友好の手」イニシアチブ(1994-2006)は「1941-1945 年の戦時中の活動により、オーストラリアと日本で苦痛を受けた人々の有意義かつ永続的な和解」を促進した。

⁴ テリー・コルフーン氏が日記に記し、「友好の手第一部」(1994-98)の注に記したとおり。

⁵ POW 研究会の活動の報告 (2002-2015) については、以下を参照。 http://www.powresearch.jp/en/about/about_latest_e.pdf

日豪草の根交流計画(2011-2017)

本計画を復活した目的は、

「オーストラリア人の元戦争捕虜を日本に招待することにより日本とオーストラリアの両国民の相互理解 を深めることにある。本計画には、戦後の和解と人的交流をさらに促進する機会を設けることが期待され ている6。」

2011 年から 2017 年にかけて、さらに 61 名のオーストラリア人(元戦争捕虜、元戦争捕虜の未亡人やその家族)が日本を訪問した。

この内 22 名は軍人の元戦争捕虜、3 名は民間人の戦争捕虜、1 名は医療(看護師)の戦争捕虜であった。元戦争捕虜は全員が太平洋戦争中(1942-1945)に大日本帝国軍の捕虜になった。

本計画の内容と構成

元戦争捕虜(とその家族)は尊敬と尊厳をもって扱われ、日本政府高官から謝罪を受けた。元戦争捕虜は個人的に重要な場所や思い出がある場所を訪問することも推奨され(また、支援を受け)た。

訪問の度に、日本人(特に若い世代)と会う機会が 設けられ、そこでは元戦争捕虜(とその家族)が自 分の話をし、質問に答える機会が設けられた。



2014 年10 月22 日、元戦争捕虜のグループが 岸田文雄外務大臣(当時)を表敬訪問

最後の訪問 (2017年1月23日~30日)

存命の元戦争捕虜による最後の日本訪問は 2017 年 1月に行われた。

ジャック・ホップグッド氏 (96) とオーストラリア 人元戦争捕虜 (故ゴードン・ギブソン氏、故ヘンリー・フレデリック・リーチ氏、故ラルフ・ビクター・ブランド氏) の存命の未亡人 3 名が、家族や付添人とともに 8 日間の日本訪問に参加した。

豪州戦争記念館の上級歴史研究家であるラクラン・グラント博士も、最後の日本訪問に招かれた。

ジャック・ホップグッド氏は、横浜にある英連邦戦 死者墓地に花輪を供えた。



オーストラリア人の退役軍人であるジャック・ ホップグッド氏は 1942 年に戦争捕虜になった (ABC ニュース: レイチェル・ミーリー)

^{6 (2011} 年 3 月の訪問に向けて) 元戦争捕虜宛に在オーストラリア日本大使館が RSL に提供した「基本的情報」のアドバイスから抜粋。

元戦争捕虜友好計画で日本を訪問したオーストラリア人の概要⁷

1997 年度 8から 2005 年度までの訪問

第一次の計画では、59 名のオーストラリア人が日本政府からの日本への招待を承諾した。参加 者にはオーストラリア人の元戦争捕虜、その家族や付添人が含まれていた。また、退役軍人コミ ュニティと全豪退役軍人会幹部を対象に、2度の「プロモーション的な」訪問が企画された。

この計画の成功は当初から明らかであり、このこと(及びこうした計画を提供する必要性を受け 入れる意見が広がったこと)が、より体系的な計画の内容と範囲を定めるうえで影響した。この ことは、日本政府が2010年に日豪草の根交流計画を再開することを後押しした。

b. 2010 年度から 2016 年度に行われた訪問

以下の表は 2011 年から 2017 年にかけて日本を訪問した参加者の概要を示している。

	2010 年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度	2016 年度	合計
訪問日	2011年 3月1日~ 9日		10月1日~	9月30日~	10月20日~	11月9日~	1月23日~	
参加を応募した元戦争捕虜の数	7	13	5	7	4	10	1	46
参加した元戦争捕虜の数	5	5	4 ⁹	4	4	3	1	26
参加した未亡人、付添人等の数	5	5	4	4	5 (1) ¹⁰	4 (1) ¹⁰	8 ¹¹	35 (2) ¹⁰
日本を訪問した参加者の総数	10	10	8	8	9	7	9	61 (2名の追加の参加者 を含む)
参加した戦争捕虜の平均年齢(歳)	89.8	91.6	87.8	92.3	94.3	95.0	96.0	92.54

戦後和解のプロセスの一環としての日豪草の根交流計画(2011-2017)に参加した元戦争捕虜とその未亡人の一覧

2011年3月1日-9日

Harold Ramsey POW (89) Norman E Anderton POW (89) Alfred John (Jack) Simmonds POW (88) Charles Rowland (Rowley) Richards POW (94) GF (Fred) Brett POW (85)

2011年11月27日-12月5日

David W. Barrett POW (89) Alfred J Ellwood POW (89) Barton D Richardson POW (91) Arthur R. Gamble POW (93) Lorna Johnson POW (96)

2012年10月1日-8日

Colin Begley (Civilian) POW (79) William Schmitt (Civilian) POW (94) Colin Hamley POW (90) Elsa Hatfield (Civilian) POW (88) June Patricia Martin (Civilian) POW (79) *付添人として参加

2013年9月30日-10月7日

Charles Edwards POW (95) George (Peter) Dixon POW (92) Adye Rockliff POW (91) Alexander White POW (92)

2014年10月20日-27日

Russell W. Ewin POW (97) Milton (Snow) Fairclough POW (93) Louis Hill POW (91) Richard Ridgwell POW (96)

2015年11月9日-16日

John Gilmour POW (96) Jack Thomas POW (95) Keith Fowler POW (95)

2017年1月23日-30日

Jack Hopgood POW (97)

Phyllis Leech, widow of the late Henry Frederick Leech POW Pauline Gibson, widow of the late Gordon Gibson POW Diana Bland, widow of the late Ralph Victor Bland POW

⁷2つのプログラムにより、理解、友好、和解の精神に則って120名のオーストラリア人が日本を訪問した。 (2010年~2017年に日本を訪問したオーストラリア人元戦争捕虜のリストは表1を参照。)

⁸ 日本の会計年度は日本政府の会計年度(4月1日から翌年3月まで)を意味する。

⁹³名の民間人 POWに対する日本への招聘を含む。

¹⁰ 付添人が自費で参加。

¹¹ POW の未亡人3名が招待された。更に、豪州戦争記念館の歴史研究家として1名(ラクラン・グラント博士)が招待 された。

日本側参加者の声

2010 年度から 2016 年度までの 6 年間に、元戦争捕虜を含む退役軍人関係者 61 名が訪日した。 日本国内での訪問先で受け入れ関わった方々の感想や印象を、日本外務省が聞き取って以下のと おりまとめた。

POW 研究会(毎年度、都内にて市民交流会を開催した他、各訪問先に同行することもあった): 笹本妙子事務局長より

- (a) (平成22年度)ラムジーさんは、一行のうち反日感情が最も強い人だったというが、帰国後、「今の日本人に会ってみたいという好奇心から、訪問する気になったが、日本に行って本当に良かった。65年前の日本人と全く違う。会う人皆、感じが良く親切だった。日本人を褒める日が来るとは思いもよらなかった。」と語り、変貌ぶりに皆が驚いた。帰国の2日後に東日本大震災が発生し、ラムジーさんは「日本で会った人たちは大丈夫だろうか」と本当に心配していたと聞く。彼の変貌ぶりを知ったビクトリア州の元捕虜仲間達は、その後続々と訪日することになった。
- (b) (平成 23 年度) エルウッドさんは、国会議員との懇談会で、凄まじい拷問を受けた体験を、体を震わせ涙を流しつつ語ったが、翌日の市民交流会では、獄中で密かに食べ物を差し入れてくれた日本兵にお礼がしたいと、その日本兵探しを POW 研究会に依頼した。私たちは手を尽くして探したが、彼の願いにこたえることができなかったのは残念だった。ジョンストン女史は、抑留所があった横浜市戸塚区の小学校で講演し、当時を知る近隣の人々と思い出を語り合い、和やかな時を過ごした。彼女の来訪は、埋もれていた地域の歴史を次世代に伝え、抑留者と日本との間のわだかまりを解かし、本人たちだけでなく、迎えた日本人側にとっても大きな意義があったことを実感した。
- (c) (平成24年度)「原爆の子」佐々木禎子さんの母校・幟町小学校で交流会が行われた。元捕虜の方々はオーストラリアの国民歌「Waltzing Matilda」に迎えられ、自分達の体験を語り、子どもたちの「折鶴が飛ぶ日」の歌に耳を傾け、学校を去る時には、皆感動で涙が溢れたという。その後、一行は平和公園の「原爆の子の像」を訪ね、ベグリーさんが、ブリスベンの子ども達に折ってもらった千羽鶴を捧げた。
- (d) (平成 25 年度) 山陽小野田市の収容所跡地での近隣住民との懇談で、思い出話に弾んだ。ロックリフさんは、「この旅のハイライトだ!」と大層喜んだ。かつて敵味方だった者同士が、苦しい時代を乗り越え、平和を共有できる幸せをかみしめているように思えた。
- (e) (平成 26 年度) 直江津の収容所跡地の平和公園に、亡くなった捕虜と刑死した日本人双方の慰霊碑が設置されて以来、多くの元捕虜や家族が訪問するようになったが、日本人の慰霊碑に献花する人はいなかった。ヒルさんは、捕虜慰霊碑に献花した後、「日本人の慰霊碑はどこか?」と尋ね、そちらにも献花した。慰霊碑建設から 19 年、元捕虜が日本人の慰霊碑に献花したのは初めてで、皆が驚き、感動した。3 度目の訪日で、ヒルさんの心に大きな変化が生じたようだった。
- (f) (平成 27 年度) 皆が、心身の傷を克服しての来日だったが、日本への恨みは語らず、戦前とは全く違う日本に来られた事を喜んだ。幼稚園の子どもたちの可愛らしい姿に、日本の明るい未来を見出したと語った。
- (g) (平成 28 年度) ホップグッドさんは、日本兵にひどく殴打され骨折した経験がある。彼は、「もし、ここで昔の日本兵に会ったら、どんなことを言いたいですか?」と聞かれ、「こんにちは、ビールを飲もうぜ!」と答え、交流会の会場を沸せた。数多くの捕虜の記録に接してきた豪戦争記念館上級歴史研究家のグラントさんは、日本人の残酷さがとかく強調されがちだが、捕虜と日本人との間で秘かに育まれた友情も沢山あり、心ある捕虜たちは、残忍なのは日本の軍隊であって、個々の日本人は本質的には親切で礼儀正しい人たちであると見ぬいていたと語った。「親切というものはどんな人間にも見出せるものであり、共感も同様に世界共通のものだ」というリチャーズさん(平成 22 年度に訪日)の言葉を引用し、これこそがより良い世界への希望となるのだと締めくくった。

英連邦横浜戦死者墓地(墓参を毎年度受け入れ):小林賢吾マネージャーより

この事業は大きな役割を果たしてきたと考えます。ここに眠る方々の関係者は、墓参により何らかの心の清算ができたと考えます。彼らの感謝の言葉や穏やかな表情からそれが窺えます。平和で思いやりのある現代日本に対しても、安心感を抱いたのではないでしょうか。地域の瀬戸ヶ谷小学校の生徒が、捕虜体験を直接聞くことができたこと、また、元捕虜の方が思いを直接伝えることができたことは、将来に繋がる出来事であり、双方に大事な時間を提供できたと思います。

ディビッド モートン氏 (徳島大学准教授)より

2011年から2017年の間、本プログラムを7回程お手伝いすることが出来て大変光栄でした。毎回、グループとは京都で会い、1日から2日間楽しく過ごしました。彼らに霊山観音の歴史について説明し、霊山観音に保存されている第二次世界大戦に関連する重要な資料をお見せする機会を頂いたことに感謝しています。霊山観音を訪問した方は全員、特に元戦争捕虜の参加者の方々は、この資料に大変強い興味を示しました。彼らから、霊山観音を訪問できたこと及び霊山観音に関する私の研究に感謝しているという感想を直接聞いたり、プログラム終了後に読んだり、その後個人的なお手紙を頂いたりして、嬉しく思いました。世界平和を推進するために建てられた寺である霊山観音の案内人として、この重要なプログラムのお役に立つことができたのは名誉なことです。

横浜市立中和田小学校(同小学校の近くにあった女性戦争捕虜収容所に収容されていた元従軍看護婦・ローナ・ジョンストン女史が、平成23年度に同小学校を訪問): 安田芳美副校長先生(当時)より6年生の児童にとって身近な話ではなかったと思いますが、お話をよく聞き、色々と質問も出ました。当時は、東日本大震災の少し後で、「上を向いて歩こう」を学校でよく歌っており、ジョンストン女史の学校訪問時にも6年生が歌いました。児童との交流会の後、地域の方々が会いに来られました。その中の中和田小学校の元PTA会長でいらした山村金平さんは、「会いたかったよー」と言っておられました。ジョンストン女史は、当時、さつまいもを少年からもらったことを覚えておられ、渡したのは山村元会長だったということで、お互いが繋がり大変喜んでいました。当時を思い出して、お話が弾んだようです。戦争中に知り合った人々と再会したことを大変喜んでいたのが印象的でした。

板橋区立常盤台小学校(平成 26 年度、ラッセル・ユーウィン氏、ローレンス・ヒル氏、ミルトン・フェアクロー氏、リチャード・リッジウェル氏が訪問): 副校長先生より

1 年生が給食の準備や配膳を行う当番活動を見ていただき、日本文化の様相、我が国の伝統文化や風習を伝える経験ができたのは意義深い。何より、純朴で素直な子どもたちに接していただき、日本文化や小学校教育の実態に理解を深めていただいたと思う。本校児童にとっても、外国の方と直接ふれあう交流は、国際理解感覚を養う素地作りができ、価値を見いだしている。

学校法人緑ヶ丘学園・緑ヶ丘幼稚園(平成 27 年度、ジョン・バリー・ギルモア氏、ジャック・レントン・トーマス氏、キース・ジョン・ファウラー氏が訪問): 篠直嗣園長先生より

元戦争捕虜の方々が来られ、そのわだかまりもなく、和やかな雰囲気で幼稚園に訪れ、笑顔を見せる方ばかりで、元戦争捕虜の方々との交流は園児にとって楽しい一時であり、様々な意味で良い影響があったと思う。元戦争捕虜の方々は同じ敷地内にある神社も訪ねられ、良い経験をされたと語られた。

信越化学工業株式会社武生工場 (平成 28 年度に未亡人のポーリーヌ・ギブソン女史が訪問) : **総務グループ・牧野弘嗣様より**

ギブソン女史が来場され、まずは過去の資料を使ってご説明しました。最初は緊張もあってか、重い雰囲気で耳を傾けているご様子で、ご主人様を思い出されてか、涙ぐまれる場面があったことが印象に残っています。しかし、次第に気持ちが楽になられたのでしょう。明るい表情が見え始め、生前のご主人様からお聞きになったと思われる、私たちが知らなかった話しをお聞きすることが出来ました。最後に車で工場内を一周し、ご主人様が生活されていたと思われる場所で記念撮影をし、工場を後にされました。その時の写真は笑顔で写っており、満足していただけたのではと感じました。

山陽小野田市役所(平成 25 年度にチャールズ・エドワーズ氏とアディ・ロックリフ氏が訪問): 当時の担当者の安重 賢治氏より

当時を知る年配の近隣住民との交流会では、「収容所時代は厳しい時期だったが、地元の人は上陸の際に荷卸しを手伝ってくれ、終戦後は物資の物々交換をするなど気持ちよく過ごせた。」と当時を振り返り、大変楽しそうに過ごしておられました。エドワーズさんの帰国後、同行した孫娘のキャロラインさんは、日本での動画をブログに載せ、この訪問がいかにエドワーズさんにとって癒しとなったかを伝えていました。本人やご親族の中にあるわだかまりを消化し、克服する上において、収容所訪問と現地住民との交流は、何物にも代えがたい意義があると実感しています。

オーストラリアからの声 12

「絶対に忘れはしないが、許すことはできる」 ルイス・ヒル 元戦争捕虜 (91)

本報告書のこの章では、*日豪草の根交流計画*の一環として日本への招待を承諾したオーストラリア人の元戦争捕虜、未亡人や家族、(近年では)付添人¹³の発言や反応に焦点を絞る。

2011 年から 2017 年にかけて訪問した元戦争捕虜とその家族の反応をまとめたものを以下に記載する。

参加者の反応の分析

参加者は、本計画の主催者(外務省、日本政府)、支援団体(POW 研究会、英連邦横浜戦死者墓地、学校など)、ガイド、イベントの主催者、通訳など訪問期間を通じて労を惜しまず参加者をサポートした全ての方を絶えず高く評価した。

参加者は、本計画のすべての面を評価し、友好的な計画の下で日本に招待されたことについて、ほぼ全員が感謝と謝意を表した。

ほとんどの参加者にとって、日本政府から一人一人の元戦争捕虜に対して直接謝罪があり、それが日本政府高官から伝えられたことが、本当の意味で記憶に残る訪問のハイライトとなった。

参加者は、謝罪の度合いと、大日本帝国軍によってオーストラリア人の元戦争捕虜が受けた痛みと苦痛に対する心からの反省と悲しみの念に感動した。

日本の人々による謝罪

ほとんどの参加者が、政府の謝罪と日本人の言葉にこれほどの誠意が込められるとは予想していなかった。

「旅行のクライマックスだった。謝罪を受けて非常 に感動した。」

- 2011 年 11 月~12 月にかけて日本を訪問した元 戦争捕虜の発言(氏名は確認されず) 「これはすごいことだ、このミーティングは和解に向けた大きな前進だと思った。」

- 2011 年 11 月~12 月にかけて日本を訪問したアルフレッド・エルウッド氏 (POW) とその家族の発言と思われる。

多くの参加者にとって、その謝罪は長年抱いていた反日感情、あからさまな猜疑心、根強い懐疑 論が、許し、友好、和解の精神に変わった転機として挙げられた。

日本国、日本人、国家の威信、戦時中に引き起こされた苦しみへの悔恨を理解し受け入れる、これまでになかった表現が見られるようになった。

 $^{^{12}}$ 「オーストラリアの声」は、2011 年から 2017 年までの訪問の記録とプログラムに関するアンケートへの元戦争捕虜(と付添人)の回答(2011 年-2017 年)、及び RSL が元戦争捕虜に行ったフォローアップ・インタビューに基づいている。

¹³ 日本・POW 友好プログラム(2011-17 年)の下、日本政府は元戦争捕虜とその付添人を含めるよう招待リストを拡大した。本プログラムで日本訪問を希望している元戦争捕虜の年齢と健康状態に日本政府が配慮した結果、この変更が行われた。

訪日時の最初の数日間でこれらの受け入れと友好の感情が芽生え、プログラムに計画されている 訪問が進むにつれて、その感情が強まっていった人もいた。



旧日本軍の捕虜収容所の捕虜監視員であった在日韓国人が自ら名乗り出て謝罪した例もあた。(2014年10月) 出典:POW 研究会

訪問

訪問は 3 つのカテゴリーに分類された。日本にとって重要な場所(広島、京都、奈良)、英連邦に関して重要と思われる場所(英連邦横浜戦死者墓地)、そして(多くの参加者にとって)最も重要なものとして、 個人的な思い入れがある場所である。



英連邦横浜戦死者墓地のオーストラリア区域で午前9 時半 に行われた追悼式。オーストラリア大使と大使館員が出席 した。バグパイプが演奏される中、元戦争捕虜一人ひとり が十字架の下に花輪を供えた。(2011 年 11 月) 出典: POW 研究会



霊山観音寺院を訪問(2013 年 10 月) 出典: POW 研究会

参加者はこうした訪問の重要性を認め、参加者の中には戦時中と戦後に日本人が経験した苦痛と苦難に対する感情に初めて言及した者もいた。

この感情は、ある参加者によって最もよく言い表されていると思われる。日本訪問の終わりに、 彼は次のように発言した。

「戦後の日本人がどうなったか考えたことなどなかった。 この旅行で、オーストラリア人の戦争捕虜だけでなく、日本人も苦痛や苦難に耐えたことを教わった。 我々の思いは、もはや一方的なものではない。」

-2011 年 11 月~12 月にかけて日本を訪問したアルフレッド・エルウッド氏 (POW) とその家族の発言

英連邦横浜戦士者墓地を訪れた人の多くは、墓地を訪れて亡くなった同志の墓に花を供える機会を得られたことに感謝した。



英連邦横浜戦死者墓地 (2013 年 10 月) 出典: POW 研究会

元戦争捕虜は日本訪問が受容と和解に大きく寄与するとたびたび述べ、墓地を訪れた人のほとんどが訪問の重要性を認めた。

ある元戦争捕虜の発言がこの点を表している。

「POW 研究会には大変お世話になった。非常に感動的な訪問だった (英連邦横浜戦死者墓地)。元戦争補虜の扱いについて知っている人や 気にかける人が日本にいるとは思っていなかった。

日本人が親切で思いやりがあることに驚いた。

この訪問中に出会った日本人のおかげで、私たちの考え方が変わった。」

- 2011 年 3 月に日本を訪問した元戦争捕虜のハロルド"ローリー"ラムジー氏 (98) と スティーブン・ラムジー氏 (息子) の発言



横浜にある東芝鶴見工場を訪問した ラムジー氏(2011 年 3 月) 出典: POW 研究会

個人的に思い出深い場所の訪問も、友好と和解のプロセスに重要な役割を果たした。

参加者は個人的な訪問の重要性を述べ、彼らが和解、許し、友好に向けての重要な道程に乗り出す機会を日本政府が提供してくれたことに歓迎の意を表した。

良い思い出ばかりでも悪い思い出ばかりでもない、多くの個人的な記憶をよみがえらせてくれる場所を再び訪問した時の気持ちについて、それぞれが率直に語った。



2011 年 12 月 1 日、ローナ・ジョンストン女史は 彼女が戦時中収容されていた横浜市戸塚の収容所 跡を訪れた。(現在は住宅地になっている)収容 所周辺を散歩した後、戦時中のことに詳しい地元の住民が集まっている山村さん宅に立ち寄った。その内の1 人は、当時看護婦の調理を担当していた女性の義理の娘だった。他の人は当時まだ子供だったが、収容所にいた看護婦達を覚えていた。出典: POW 研究会



POW 研究会が東京で催 した、理解を深めるため の交流ミーティング (2011 年 11 月)



2011 年12 月1 日、バレット氏は倉敷を訪問し、 日本の友人に会った(写真)。また戦時中は泰緬 鉄道において通訳を務め、終戦直後はバレット氏 とともに鉄道沿線の戦争墓地捜索隊に加わった永 瀬隆さんの墓参りをした。 出典: POW 研究会

日本に対する態度の変化

日本と日本人に対する訪問前と訪問後の思いについても、参加者に尋ねた。 以下は発言の一部である。

「日本軍を依然敵対視していた。過去のことを忘れようと努力した。 今回の旅行はその意味で効果があった。

日本人に会ったからだ。オーストラリアに戻ったら日本と日本人に拍手を送るよ。」

- 2011 年 11 月~12 月にかけて日本を訪問したアルフレッド・エルウッド氏(POW)とその家族の発言



フェアクロー氏と子供たち(2014 年 10 月) 出典 : POW 研究会

「戦争捕虜の経験が日本人と日本文化に対するミルトンの 気持ちに影を落とした。彼は長年憎しみを抱いていた。

日本で会った人々が過去の過ちを正し和解しようと前向き に誠意を持って接してくれたことに、心が動かされたととも に非常に感謝している。ミルトンはずいぶん気持ちが晴れた ようだ。

日本で温かく惜しみない歓迎を受けたことで、ミルトンの考え方は変わった。2人とも日本で過ごした時間を懐かしく思い出すだろう。」

- 2014 年に 93 才で日本を訪れたミルトン(スノー)フェアクロー氏 (POW) の付添人の発言



広島の平和記念公園を訪れたリッジウェル氏と 他の元戦争捕虜(2014 年 10 月)出典: POW 研究会

「よくわからないが、決して怒りではない。葛藤に近い。 誰に対してもくつろいだ心地よい気分だ。

日本人もオーストラリア人と変わらない。」

- 2014 年 10 月に 96 才で日本を訪れたリチャード・リッジウェル元 戦争捕虜の発言 「百聞は一見にしかず。実際に日本人に会ったことで自分の世界から抜け出せた。 日本は戦後の復興に誇りを持っているが、もっともなことだ。

当初つまり 1945 年から、日本は世界に居場所がないと考える理由はなかった。 日本は戦争に負け代償を払った。自分は擁護者でも裁判官でもないが、美しく礼儀正しいこの国に来て、 心の温かい様々な人々に出会った。彼らの友情以上に寛容なものはない。

想像もしなかった経験だった。」

2015年11月に日本を訪問したジャック・トーマス元戦争捕虜の発言

「日本の人達がこれほど反省しているとは知らなかった。罪悪感が温かい友情に変わる日が待ち遠しい。」

2015 年 11 月に日本を訪問したジャック・トーマス元戦争捕虜の付添人であるグレイム・トーマス氏の発言

「我々が出会った人々の誠意に心を動かされない人がいるだろうか。 今回の訪問を終えて、(私は)日本が平和に向けて誠意を持って進んでいくと確信し、 そのことに敬意を表する。

訪問する前は気持ちには触れたくなかった。長年自分を捕虜にした人を憎んでいた。 後年は感情があいまいになった。なぜなら(原文のまま)憎悪が私の身を滅ぼしていたからだ。 訪問前はそうだった。

理由は上で述べたとおり。私の態度は完全に変わった。日本の友好大使になりたいと思う。 日本びいきになるよ。」

2015年11月に95才で日本を訪問したキース・ファウラー元戦争捕虜

日本の一般市民との友好的な交流会は、日本を訪問した元戦争捕虜が態度を変化させるに際して、 重要な役割を果たした。



東京で開かれた日本の市民との友好的な 交流会(2012 年 10 月) 詳細: 場所:大阪経済法科大学東京麻布台セミナ ーハウス 元捕虜・家族と交流する会が企画 POW 研究会が協力

歴史的意義

回想録:日本との戦後和解に向けて

オーストラリア陸軍に所属していた私の父は、日本との戦争で亡くなりました。

1959 年に日本を訪問した私は、期せずして、皇太子殿下(現在の天皇陛下)と正田美智子様の結婚の儀が執り行われたうららかな春の日を東京で迎えました。大勢の日本国民とともに、私は式典のパレードを見ていました。私が見た日本は、戦争の影響が残るとはいえ、秩序正しい社会であり、国民は親切で礼儀正しいものでした。私の父が亡くなったのは日本との戦争によるものだとしても、日本国民に対していささかの反感を持つ必要性も感じませんでした。

しかしオーストラリア国内では、特にオーストラリア人戦争捕虜に対する虐待の実態が明らかになると、反感は根強いものとなりました。オーストラリアを訪問した岸信介首相が 1957 年 12 月 4 日に国会で演説し、戦争中の出来事に対する深い遺憾の意を表明したものの、良くは受け入れられませんでした。

40 年後の 1997 年、私は W.B. "ディッガー"ジェームズ少将から全豪退役軍人会(RSL)会長の職を引き継ぎました。私は前会長と長谷川和年大使(日豪関係の強化に尽力され、後年、日・豪・ニュージーランド協会の会長を務められた)との協議を詳しく承知しておりました。当時は「キャンベラ奈良平和公園」の命名をめぐって RSL の内部やキャンベラ市民の間で議論が巻き上がっていて、私はその外交的行き詰まりとでもいうべきものを引き継ぐことになったのです。この問題については、しばらく成り行きを見守ることとしました。

私は、第二次世界大戦中に泰緬鉄道のチャンギやヘルファイアー・パスなど、悪名高い施設で日本軍の捕虜となっていた元豪軍兵士の団体を数多く訪れました。元捕虜達が受けた仕打ちを聞くと、わたし自身も強い苦しみを感じました。ある会合で話をした際に強く印象に残ったのは、元捕虜の多くが日本人に対する憎しみをあらわにしたことであり、その気持ちは私もよく理解できるものでした。しかし一人ずつ話をしてみると、ほぼ全ての人が、決して忘れることはできないにしても許したいと語ったのです。2人の有名な元捕虜、軍医の"ウェアリー"ダンロップ大佐と看護師のビビアン・ブルウィンケル女史から聞かされていたのは、まさにこうした考え方でした。

戦後 50 周年が近づくにつれ、元捕虜の心を最も苦しめていた問題は、日本帝国軍による捕虜や現地の労働者などへの仕打ちについて、若い世代への教育に取り組む姿勢が日本政府に見られないと感じていたことだと思われます。そうした状況を受けて、私は歴代の駐豪日本大使と率直な議論を重ねました。高橋雅二大使からは、日本の内閣が旧敵国との和解に向けた取り組みに着手していることを教えていただきました。私もこうした取り組みを心から支持しました。その後2000 年には、日本政府の招待を受けて妻とともに日本を訪問しました。日本では訪れた先々で歓待を受け、多くの政府職員、自衛官、歴史家と率直に意見を交わす機会が得られました。

嬉しいことに、私の訪日に続いて 2002 年から、RSL 全国幹部会の役員も日本に招待されました。 大島賢三大使と畠中篤大使には特にお力添えをいただきました。和解の雰囲気は高まりつつある と思えました。またサーファーズ・パラダイス RSL の支援により、広島市立舟入高等学校の生 徒の訪問を受けたことも喜ばしいことでした。さらにカウラで日本からの観光客グループや交換 留学生と話をする機会や、RSL の全国本部で日本から来た政治家の視察団をもてなす機会も得 ました。最後には、対日戦勝記念日 (VJ Day) に戦争記念館で日本の大使が献花される姿を見 ることができたことが、一番の思い出です。

全豪退役軍人会(RSL)元会長・少将 ピーター・フィリップス

歴史的意義

元戦争捕虜を日本に招待することにより、戦後和解と友好を通じた両国間の相互理解の促進を目的とした「日豪草の根交流計画」は、平成9年度に始まり、第一次と第二次あわせて約16年間で120名の元戦争捕虜やその関係者を招いた交流事業である。日本滞在中、彼らは小学生からお年寄りまで多くの市民との交流を行った。「参加者の声」に現れているように、双方が和やかな時を過ごし、歴史に真摯に向き合う姿勢を互いに示せたことは、本計画の重要な成果と言えるであろう。

「東経 135 度の友人」と称される日豪両国は、激動するアジア太平洋地域の平和と安定にとりかけがえのないパートナーとなった。その関係は第二次世界大戦後、1957 年の日豪通商協定署名によって土台が形成された。さらに 76 年には日豪友好協力基本条約(「奈良条約」)が結ばれ、両国は経済や貿易の分野に限らない、あらゆる分野における相互理解と協力の促進を目指していった。民間交流も盛んになり、いまや日豪間の姉妹都市提携は 100 件を越え、双方の市民の多くが観光、留学、ビジネスなど多様な目的で訪問している。

このように両国関係は発展、多様化したが、第二次世界大戦中の元戦争捕虜としての経験のため、 日本に対して特別な感情を持つ豪州人が一定数いることは否定できない。第二次大戦中に旧日本 軍によって多くの連合軍兵士が捕虜となった事実は、豪州だけでなく欧米及びアジア諸国の対日 批判の最大のよりどころとなってきた。

豪州にとって第二次大戦は、「多くの捕虜を失った戦争」として記憶されている。捕虜は戦争終結の時に安全に国に戻るはずであったが、そうはならなかった。参戦した豪州兵のうち2万7,073人が命を失ったとされ、その死亡率は約2.7%であった。一方で約2万2,000人もの豪州人が旧日本軍の捕虜となり、そのうち36%にあたる8,031人の方が亡くなった(豪州戦争記念館)。つまり死亡率は戦場の13倍を越える。

豪州人にとって、第二次世界大戦の歴史を思い起こす時、元戦争捕虜の話は忘れられてはならないものである。そして生還した元補虜の多くが、様々な媒体を通じて捕虜収容所での厳しい生活や自分たちの経験を語ることで、戦争を知らない世代を含め多くの豪州国民が捕虜体験を共有していったのである。

我々日本人が第二次世界大戦の戦没者を想起し、深い哀悼の意を感じる一方で、日本では、元捕虜の話についてメディアに取り上げられる機会は限られており、元戦争捕虜たちの感情について思いやる機会が限られている。日本と豪州との元捕虜に対する態度の違いが一部の豪州人において、深い不信感と特に近代の日本に対する特別な感情を引き起こすこととなった。元戦争捕虜たちは、苦痛を与えた当時の旧日本兵を嫌悪するだけでなく、戦時中に彼らの同胞に起きたことに無関心な現代の日本人にも失望しているのである。

「日豪草の根交流計画」は、多くの日本の市民が元捕虜の経験に耳を傾ける貴重な機会となり、元捕虜の犠牲の上に成り立つ平和に対する理解を新たにすることとなった。その一方で、本報告書に見られるとおり、今日の日本を訪問することで、元捕虜にとっては、捕虜収容所の当時とは明らかに異なる日本人、日本国の姿を実感する機会となった。こうした双方の気持ちが戦後和解を進め、相互理解を深める重要なきっかけになっていったといえよう。

想像を絶する過酷な体験をした元捕虜にとって、日本を訪問することは相当の勇気と覚悟が必要であったに違いない。彼らが、非常に厳しい仕打ちをした日本への反感や嫌悪感を乗り越え、訪日を決断したことを心に留めなければならない。彼らには、過去の出来事を双方の不和の種にはさせず、未来志向で平和を守り抜いていこうとする決意が見て取れ、多くの日本人の心を打ったであろう。そして、平和に向け前進し、過去を克服する、元捕虜の真摯な態度に深い敬意を表する。

同計画は日豪市民の相互理解及び和解に大きな役割を果たしてきた。これが、両国のパートナーシップのより強固な基礎となることは疑いの余地がない。ただし和解や相互理解は、たとえそれがある段階で一定程度の成功の域にまで達したとしても、永続するものではなく、時代や異なる環境から常に挑戦を受けていくものだ。そのために不断の努力が必要であり、今後も一人一人の市民がその営みに携わっていかねばならない。

獨協大学

外国語学部交流文化学科長 外国語学部教授·博士(国際関係論) 永野隆行

後文

本年は第二次世界大戦において日豪が主に戦火を交えた 1942 年から数えて 75 周年に当たります。これを記念して豪州各地で慰霊式典等が開催され、私自身も 2 月にダーウィンで行われた空爆記念式典及び 5 月にキャンベラの国防省で行われた珊瑚海海戦記念式典に参加する機会を得ました。その際、多くのオーストラリア人の方々から和解の精神に満ちた寛大なメッセージをいただきました。日豪両国が過去を共に乗り越え、関係の深化に向けた前向きな力に変えることができる成熟した関係に達していることを改めて認識するとともに、日豪関係の一層の推進に向けた決意を新たにした次第です。

こうした和解の精神を築き上げる上で、日豪草の根交流計画は大きな役割を果たしました。本計画の下、多くの元戦争捕虜の方々やご家族を含めた関係者が日本を訪問され、現在の日本の姿を実際にご覧になられました。その体験と感想が本報告書には詳述されております。本計画が日豪間の和解を推進し、元戦争捕虜及び関係者の方々が新たな対日観を形成される上で多大な貢献をなしたものと私は確信しております。訪日していただいた元戦争捕虜の方々、ご家族はじめ関係者の方々に衷心より御礼申し上げるとともに、本計画の実現に尽力いただいた全豪退役軍人協会(RSL)の方々に深く感謝いたします。また、日本側で訪問団受け入れの労をとっていただいた方々にも厚く御礼申し上げます。

我々は、先の大戦において計り知れない損害と苦痛を豪州を含む関係諸国に日本がもたらした史 実を決して忘れません。こうした歴史を踏まえ、戦後、日本は戦争の惨禍は二度と繰り返しては ならないと決意し、自由で民主的で平和な国家を作り上げて参りました。そうした戦後の歩みの 中で日豪両国は様々な面で協力関係を深化させ、現在の「特別な戦略的パートナーシップ」を築 くに至りました。その背景にこの両国草の根レベルにおける和解の精神があったことを改めて強 調したいと思います。

今回、豪州及び日本において本計画の終了記念事業を行うこととなりましたが、本計画の精神を次の世代に受け継いでいくとともに、戦後の和解を達成した日豪両国が、地域及び国際社会の平和と繁栄に寄与できるよう努力を続けて参る所存です。

2017年9月

駐オーストラリア日本国特命全権大使

草賀純男

1997年に「日豪草の根交流計画」が開始されて以来、元戦争捕虜友好プログラムでは和解の促進に努めるとともに、元捕虜が日本を再訪して心の平安を取り戻すための機会を提供してきました。

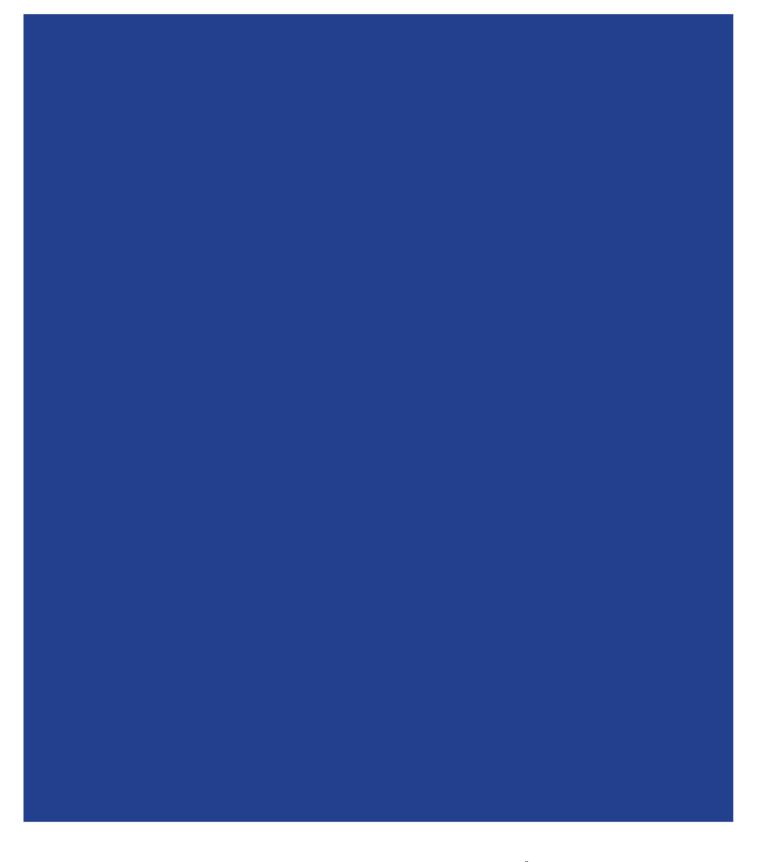
これまでに「日豪草の根交流計画」の一環として、元戦争捕虜 120 名とその家族が日本を訪問しています。参加者の感想の一部は「日本側参加者の声」と「オーストラリア側の参加者の声」の章に掲載されています。

同計画では、元戦争捕虜(とその家族)全員が、日本政府高官から謝罪を受ける機会が設けられました。また元捕虜は、それぞれの思い出の地を訪れるよう勧められました。

訪問の際には、元戦争捕虜(とその家族)が日本人を代表する様々な人々と自分の物語、体験を 共有する機会が設けられました。このプログラムは RSL と日本政府の双方にとって、戦争の歴 史を掘り下げ、戦後和解に取り組むことの重要性を次世代に教える機会となりました。

2017年9月

全豪退役軍人会 (RSL) 会長 ロバート・ディック



作成•発行:



